

# 馬娘婚姻譚の日中比較



専修大学  
漢和経済文化学院

樋口 淳  
陶 雪迎

## 0. はじめに

1999年11月にソウルの中央大学校で国際アジア民俗学会のシンポジウムが開催され、当時名古屋大学博士課程に在学していた陶雪迎さんと私は、「蚕神信仰に関する馬頭娘の研究」(陶雪迎)と「日本の異類婚姻譚—特に馬娘婚姻譚をめぐって—」(樋口)というよく似たテーマの報告を行った。シンポジウム終了後に、意見交換を重ね、生まれたのが以下の論考である。

### 1. 日本の異類婚姻譚—とくに「馬娘婚姻譚」をめぐって

樋口淳

#### 1) 馬と日本人

馬は、牛とともに日本人になじみ深い動物であるが、農耕に用いられるようになるのは、主として明治以降のことである。それ以前は、軍用、輸送用に使用されていた。

飼育される地域も東日本、とくに東北地方や中部地方の高原地帯が中心であった。

日本の馬の産地は限られ、成馬を買ってきて飼育するのが普通であったので、仲買商人としての博労が活躍した。また、山道の多い日本では、古くから輸送用に馬や牛が重要な役割をはたし、農村の若者たちが、輸送をになう「馬方」「牛方」となった。

各地を旅する博労や馬方は、世間が広く、村の人たちに他国の珍しい噂話を伝えるとともに、さまざまの昔話を伝えた。また、彼等自身が、登場する昔話も少なくない。

#### 2) 馬をめぐる口承文芸

馬をめぐる口承文芸の世界で、もっとも豊かなのは俗信であろう。東北・中部を中心とした地方の、馬と生活をともにした人々の間に伝えられた俗信には、馬を飼う上での様々の知恵が生きている。とくに馬を選ぶ上でのタブーや、民間医療、吉凶の占いなどは豊富である。

また、馬方の歌う民謡も豊かで、とくに「追分」は、その独特の発声から東アジア全域

での伝承が知られている。

昔話の世界では、「馬方山姥」「博労八十八」のように馬方、博労の登場する話もあるが、もっとも豊かなのは笑い話であろう。とくに「馬の尻に札」のような愚人譚は、日本各地に伝えられている。

ここでは、とくに「馬娘婚姻譚」をとりあげる。

### 3) 馬娘婚姻譚

「馬娘婚姻譚」は、『搜神記』や『法苑珠林』など中国の古い説話集に見られる話である。あまり長い話ではないから、『搜神記』にそって簡単に紹介してみよう。

むかし、ある大官が遠方に出征し、娘がひとり家に残された。家には、牡馬がいて、娘は大切に世話していたが、父親が恋しくて、馬にむかって戯れにいった。

「お父様を連れて帰ったら、お嫁さんになるよ」

馬は、この言葉を聞くと、手綱を引きちぎり、父親のところに行った。

父親は驚き喜んだが、馬の悲しそうな鳴き声を聞き、「家に異変がおこたのではないかと急いで馬を走らせて帰った。

そして畜生の身ではあるが、たいした真心だと関心して、秣をあたえたが馬は見向きもしない。ただ、娘を見ては、喜んだり怒ったりして身をふるわせ、足を踏み鳴らす。

これがいつまでも続くので、不審に思った父親が尋ねると、娘は馬との約束を打ち明けた。父親は「家門の恥になる」といい、馬を射殺して、皮をはぎ、庭に干した。

ある日、娘が庭で「畜生の分際で人間を嫁にしようなどとするから、皮をはがれるのだ」と、ふざけて馬の皮を足でふむと、馬の皮は立ち上がり、娘を包んで天に飛び去った。

数日後、庭の大木の枝に娘と馬の皮が発見された。おいずれも蚕と化して、糸をはいていた。その作る繭は普通の蚕とは違って糸の巻き方が厚く大きく、隣の女房が枝からおろして育てたところ、通常の繭の数倍も糸が取れたという。

そこで、その木は「喪」と同じ音をもつ「桑」となづけられた。その後、人々は競ってこれを育て、いまに至っている。

この話は、日本においても広く伝承されているが、その分布を検討してみても、それほど古い話とは思われない。おそらく、農村に養蚕の普及した江戸期以降のことであろう。

だが、とくに東北地方で「オシラ祭文」として知られるこの話は、日本のシャマニズムの伝統を考える上で特異な位置をしめている。

### 4) 『遠野物語』におけるオシラサマ

口承文芸の語りとしての「馬娘婚姻譚」を世に知らしめたのは、柳田國男である。柳田の『遠野物語』が、日本民俗学の一つの出発点であることは、日本の民俗学研究者の多くが見とめるところである。

『遠野物語』の舞台となる遠野は、いまでこそ辺境だが、かつては交通の要所にあり、柳田が物語の冒頭にしめたとおり馬市が開かれ、博労・馬方の集まる土地、つまりは話

の集散地であった。若い柳田は、1908年（明治41年）に遠野出身の佐々木喜善と出会い、さまざまな物語を聞き、記録する。

オシラサマの話は、遠野に伝わるザシキワラシ、カクラサマ、コンセイサマなどの民俗神の一つである。「大同」と呼ばれる村の旧家を中心に、各家にまつられた家の神で、30センチほどの木（とくに桑の木）の先に、男女や馬の頭が彫刻されている。多くは、二体の神で、普段は布の貫頭衣を着せて、神棚に収めてあるが、春秋二回の祭日に祭る。その際に、イタコ、アズサ、ワカなどと呼ばれる盲目の巫女が「オシラアソバセ」といって、「オシラ祭文」を語り、託宣を発したり、死者の口寄せをすることがある。こうした巫女による口寄せは、東北地方に根付いた民俗で、オシラ祭文（＝馬娘婚姻譚）そのものよりも、はるかに古い歴史をもち、青森の恐山のイタコに見られるとおり、現在でも生きている。

東アジア全域では、沖縄のユタとともに、とくに韓国のムーダンとの比較研究が、今後の一つの課題である。

### 5) 異類婚姻譚としての「馬娘婚姻譚」

馬娘婚姻譚は、日本の口承文芸としては、歴史の浅い話だが、日本の異類婚姻譚を考察する上で貴重な話である。

異類婚姻は、神話のレベルでは、本来神と人間との婚姻を語るめでたい話である。これは、韓国の檀君神話にも見られるとおりである。日本の古事記には、ヤマサチとトヨタマヒメの異類婚姻という天皇の始祖にまつわる話が伝えられている。

これが、昔話のレベルで語られる時には、異類の婚姻は「結ばれることのない悲劇」または「忌まわしい結婚」として否定される。しかし、異類との婚姻の結果生まれた者は、普通の人間にはない不思議な力が備えられていることが少なくない。

たとえば、日本の昔話「蛇婿入り」を例に考えてみよう。これは、蛇が人の姿をとって妻問いをするというこの話は、韓国の「青大将婿」とよく似た話型である。

この話が、神話レベルで「古事記」のに登場するときには、娘はイクタマヨリヒメとなり、蛇は三輪山の神となる。神婚によって生まれた子供たちは、疫病をおさえる不思議な力を持ち、鴨氏という優れた家系の始祖となる。

これに対して昔話や伝説のレベルで語られる時には、結婚は忌まわしいものとされ、蛇は魔物となり、多くは娘の知略によって退治される。しかし、時には信濃の「小泉小太郎」のように治水に不思議な力を発揮したり、巫女の家系の始祖となることもある。

馬娘婚姻譚は、すでに中国の「搜神記」のレベルでも、人間と異類の結婚を歓迎する話ではない。しかし、そこに起こる「蚕の誕生」という奇跡は、神話レベルのものである。「娘と馬は天にのぼった後に、ふたたび地上の木に現れ、蚕と化して糸はき、その作る繭は普通の蚕とは違って糸の巻き方が厚く大きく、隣の女房が枝からおろして育てたところ、通常の繭の数倍も糸が取れた」。さらに「人々は、この時から蚕をそだて、桑の葉をあたえるようになった」というのである。

これは「古事記」に、スサノオによって殺されたオオゲツヒメの「頭に蚕生り」と記されたのと同じ「蚕の起源譚」神話であり、アジア全域に広く分布する「殺された女神にまつわる作物起源神話」の一環をなすといってもよい。

## 6) 養蚕と「馬娘婚姻譚」の受容

日本における養蚕の歴史は古く、記紀神話のみならず、「倭人伝」にも「禾稻・紵麻を植え、蚕桑・緝績し、細紵・縑絲を出だす」という記録がある。(注)

しかし生業としての養蚕は律令制とともに衰え、商品作物として本格的に復活するのは江戸時代以降のことである。

「馬娘婚姻譚」が、日本に受容されたのもおそらくは江戸時代で、今野円圓輔は、林羅山の『怪談全書』に紹介された「馬頭娘(ばとうろう)」あたりが最初ではないかと推測している。(注)

馬と娘の婚姻というテーマは、現代の私たちには奇異な印象を与えそうだが、モチーフの構成からみると滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』のもととなった「槃瓠伝説」とも共通する。「槃瓠」は、やはり中国起源の犬と娘の婚姻譚で、おそらくは江戸時代あたりに文献を通じて移入されたものではないかと思われる。物語としての『南総里見八犬伝』が、大いに江戸の庶民をよろこばせたことを思えば、この種の怪異譚が歓迎される素地が当時の人々のうちにあったことは想像にかたくない。

「馬娘婚姻譚」は、文字よりも口承として多く伝えられ、鹿児島から青森まで全国に広く分布する。だが、異類婚姻譚という口承文芸の大ジャンルのうちでは、周縁的な存在であり、「蛇婿入り」や「猿婿入り」などのように、村の誰もが語るようなポピュラーな話ではない。

ただ、この話が「金満長者」「満能長者」「梅檀栗毛」などとして親しまれた遠野をはじめとする東北地方一帯は別である。

話は、巫女たちの行う「オシラアソバセ」にともなう「祭文」として語られた。昔話というよりは、儀礼の場を始原の時に送り返し、始まりの時にもたらされた豊穰を、ふたたび招来するための呪文＝神話として語られてきたのである。

江戸時代に商品作物として養蚕が普及し始めたとき、蚕の豊かな成功を祈る農民たちは、新たな神話として「馬娘婚姻譚」を歓迎したのではないだろうか。「オシラサマ」という二本の棒をトリモノとして神を呼び口寄せて、先祖供養と家の安泰を祈っていたイタコたちは、新年の予祝行事に「金満長者」「満能長者」を語り、豊穰を約束したにちがいない。

馬と長者の娘の「忌まわしくも、悲しい」そして「高貴な」物語は、イタコという盲目のシャーマンの異能を呼び起こす。天にのぼった悲劇の馬と娘は、いつか天と地をつなぎ、天上の幸を地にもたらす。

シャーマンも、また天と地を繋ぐ者である。祭りに、桑のトリモノを手に神を降ろす女は、馬と娘の恋を語ることで、娘と一体化し、天の意思を告げたのである。

## 2. 蚕神信仰に関する馬頭娘信仰

陶雪迎

### 1) 中国の蚕神信仰について

農業社会である中国にとって、「男耕女織」(農業は男、養蚕は女)は古代農業社会の一つの基本的な特徴である。「桑事に赴く」は当時の経済構造の中の重要な行為といえる。特

に生産力が低下していた時代、生産技術は様々な条件に制限され、維持するさえも難事であった。それで各業界はそれぞれの守り神を作り出した。養蚕業の守り神は蚕神である。

中国の養蚕の歴史は紀元前四千七百年前に遡ることができる。考古学者たちが、山西省夏県西陰村に、紀元前 3000 年の長さ 15.2 ミリ、幅 7.5 ミリの繭の化石を発見し、これが世界で最も古い繭と見なされている。また紀元前 2000 年、河南省の安陽小屯で出土した「甲骨文」に「桑」、「蚕」、「糸」、「帛」などの文字が刻んであった。商の時代（紀元前 16 世紀～前 8 世紀）に至ると養蚕業の発展は一つのピークに達した。紀元前 500 年の春秋戦国時代に出土された青銅器には、当時の養蚕の様子が生き生きと描かれている。また、紀元前ギリシアの文献には、中国が「蚕糸之国」と呼ばれていたことが、記載されている。中国養蚕の歴史は相当長いことだと見られる。

中国の蚕神信仰は、おおむね養蚕業が発達している揚子江流域の浙江省嘉興、湖州及び中国西南地方の四川省に分布している。現在、揚子江流域で盛んになっている蚕神信仰は馬頭娘信仰である。

蚕神信仰は、もっぱら民間の養蚕農家の間で行われる信仰ではなく、古くから代々の帝王にも重視されていた。周の時代（紀元前十一世紀～紀元前 771 年）から清朝（1644 年～1911 年）まで、蚕神はずっと国の重要な祭祀対象であり、代々の帝王は毎年祭壇を設け祭祀儀式を行っていた。

中国大部分の地域の蚕神信仰は、蚕神は女の神様として定義され、そのため「蚕姑」、「蚕花娘娘」、「蚕皇老太」などの呼び方がある。しかし一部の地域（四川省など）では、蚕神を男の神様として祭る場合もある。たとえば「青衣神蚕従」と「蚕花五聖」などである。（図 1 を参照）

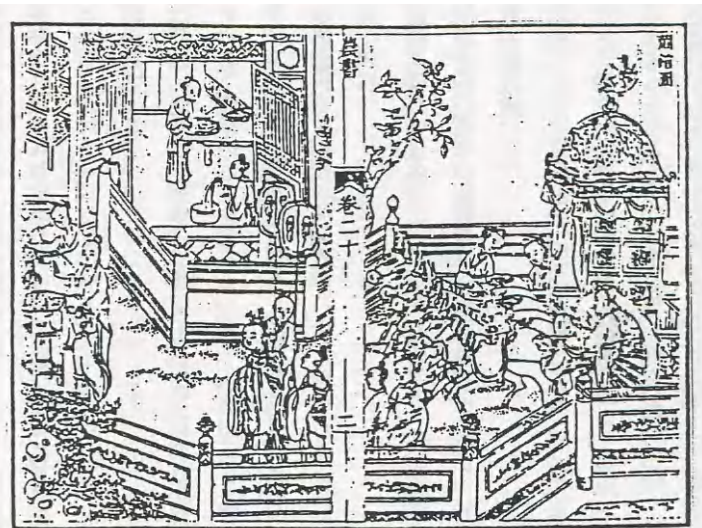


図1 『農書・蚕管図』

## 2) 蚕神信仰の類型

蚕神信仰の類型については、地域の違いによって異なる。主として「・祖」、「馬頭娘」、「蚕叢青衣神」、「蚕花五聖」のように分類することができる。

### ①・祖（図の2、3を参照）

伝説には、嫫祖は黄帝（紀元前 3000 年）の妃であり、養蚕の発明者でもあると伝わっている。（嫫祖の嫫は女偏であるが、仮に嫫の字をあてておく）『路史・后記五』には：

“黄帝之妃西陵氏曰嫫祖、以其始蚕、故又祀先蚕”

(黄帝の妃西陵氏は・祖と言う、彼女から養蚕を始めた、だから「先蚕」として祀る。)と書かれているが、劉恕の『通鑑外紀』にも：

“西陵氏之女嫫祖、為黄帝元妃、始教民育蚕、治糸繭以供衣服、後世祀為先蚕”

(西陵氏の娘嫫祖は、黄帝の妃(元妃)となり、民に養蚕の技術を教え、蚕糸から服を作り始めた、従って後世の人は彼女を「先蚕」として祀る)

と記載されている。

ここでの「先蚕」の意味は、最初に養蚕の技術を民に教えた神の事を指している。(祖のことをまた「先蚕」、「蚕母」とも呼ぶ。文献から累祖は中国民間信仰の中で最も古い蚕神ということを手を主張していると解釈できる。



図2 祭嫫図

### ②馬頭娘

馬頭娘信仰は中国各地に広く分布していて、特に蚕糸の産地である揚子江流域と四川省での影響は非常に大きい。これについては後で論じる。

### ③青衣神蚕叢

青衣神「蚕叢」信仰は四川周辺に分布して、男性の蚕神である。伝説によると、蜀地(現在四川省)の開国君主は「蚕叢」といい、彼の額には目が一つある。「蚕叢」は、各地へ視察に行く時に、庶民に桑の木植え方と蚕の飼育などを教えたといわれる。当時、庶民たちは彼に恩返しをするために、寺院を建てて彼のことを神として祭っていた。その後「蚕叢」を祭る寺院は四川省各地にあまねく分布するようになった。民間では「蚕叢」を祭ると願い事がかなうという言い伝えがある。[馬叔田 1997: 319] 「青衣神」と呼ばれる理由は、彼が郊外へ視察に行く時、いつも青い服を着ているため、「青衣神」と呼ばれることになったのである。また彼のふるさとのことは「青神縣」と呼ばれる。(図4を参考)



図3

### ④蚕花五聖

「蚕花五聖」の信仰は僅かな地域にしか伝わっていない。「蚕花五聖」の額の目も縦である。手は六本で、其のうち二本の手はそれぞれ一皿の繭を持ち、残りの四本の手は別なものを持つ。一部の地域では、「蚕花五聖」を男の神様と定めている。また一部の地域では、彼のことを馬頭娘と混同して祭る場合もある。

## 2) 馬頭娘の由来談から見る馬頭娘信仰

蚕神馬頭娘は「馬鳴王菩薩」、「馬明王菩薩」、「馬面王菩薩」、「蚕女」、「蚕花娘娘」などの呼び名がある（図5を参照）。清代の瞿灝の『通俗篇』巻十九に引く明代の朗瑛の『七修類稿』に：「馬頭娘、本荀子『蚕賦』「身女好而頭馬首」一語附会、俗称馬明王、乃神通之号、或作鳴。」（いわゆる馬頭娘は、『荀子・蚕賦』に書かれている「体が柔軟で、頭は馬に似ているもの」という句に附会して、俗に馬明王といわれている。明王の神の通号を「鳴」としているものである。）

馬頭娘信仰は、中国の蜀（四川）、杭（杭州）、嘉（嘉興）、湖（湖州）など養蚕産地に広く分布している。馬頭娘信仰の形成は以下のようにまとめられる。

民間では、馬頭娘について、様々な説があるが、基本的には彼女は頭が馬の頭（伝説では馬の皮をはおる）で、身体は女である。しかし蚕神を祭る寺院に掛かる神像では、彼女が馬に乗る姿、或いは隣に一匹の馬が立っている姿、また三人の娘が共に一匹の馬に乗る姿も有る。

馬頭娘の由来に関する伝説は、もっとも古くは『山海経・海外北経』に記載されている：

「欧糸之野在大踵東，一女子跪扱樹欧糸。」

（欧糸の野は大踵の東にあり、ひとりの女子がひざまずいて、樹によりそい、糸を吐く。）

また郭璞の注には：

「言噉桑而吐糸，蓋蚕類也。」（桑を食い糸を吐くは蚕の類だろうという。）

上述の内容は馬娘婚姻譚の最初の形態であると認識されている。その後の『荀子・蚕賦』〔荀況 戦国時代〔前313～前238〕〕には：

「此夫身女子而頭馬首者与」（体が柔軟で、頭が馬に似ているもの）とある。

文献記事の中で、これは最も早く蚕と女性と馬この三者が結びついた文献と見られる。その後、三国時代呉国張儼の『太古蚕馬記』は馬娘婚姻譚を整理して記述している。

馬娘婚姻譚は魏と晋の時代ですでに形成され、唐の時代では、記述の表現は多少の違いはあるが、主に『太平広記』巻四百九十七引「原化傳拾遺伝・蚕女」を基準として、



図4 青衣神



図5 馬頭娘

モチーフとパターンはほぼ変わりがなく、以下の通りである。

娘は戦場に赴いた父親のことを思い出して悲しんだ→娘が諸人に誓った。「父を迎えに  
いってくれるものの妻になる」→馬が娘の父親を迎いに行き父をつれて帰った→父親はこ  
の結婚の約束が許せなかった→父親が馬を殺し皮をはがして庭に張り付けた→馬の皮は娘  
をくるんで昇天した→娘は蚕になった。

その後の宋朝戴植の『鼠璞』巻の「蚕馬同本」条、元朝無名氏の『三教九流搜神大全』  
巻三「蚕女」条、及び清朝姚福均の『鑄鼎余聞』など文献にも、馬娘婚姻譚をほぼ同じよ  
うな内容を記載されている。

以上は馬娘婚姻譚の形成史をまとめたところである。

### 3) 揚子江流域の馬頭娘信仰の祭祀について

揚子江流域では、蚕神馬頭娘を祭る寺院はあちこちでよく見かける。養蚕農家が養蚕を  
教えてくれた蚕神に感謝の意を現し、また来年の豊作の祈りを捧げる為に、毎年一定の時  
期になると祭祀を行う。具体的には、祭礼が主に清明節の前後で行われる。明朝の田汝成  
の『西湖遊覧志』巻十に：

「北高峰、石磴数百級、…山半有馬明王廟。春月、祀蚕者咸往焉。」

(北高峰〔浙江省杭州市の西部にある〕には、石段が数百段ある。…山腹に馬明王廟が  
あり、春になると蚕の多産を祈るものがみなやってくる。)

清朝に至ると、揚子江流域など養蚕産地では、蚕神信仰は真っ盛りである。蚕神を祭る  
寺院は至るところで建てられ、さらに普通の佛教のお寺でも、蚕神の神像を仏像と一緒に  
並べて祭るようになった。このことから当時の馬頭娘信仰いかに盛んになっていたかは分  
かる。中華人民共和国建国後の文化大革命中、この伝統的な祭祀活動は破壊され、ほとん  
どおこなわれなくなったが、今では中国各地で再びおこなわれるようになった。

昔、馬頭娘を祭る祭祀儀式的段取りは非常に複雑で、しかも頻繁に行われるのが特徴で  
あった。江蘇省の嘉興など地域では、生産手順に従って祭祀を行わなければならない。ま  
ゆを収穫する時、養蚕農家は米の粉で小さい「繭円」と呼ばれるお団子を作って食べて、  
馬頭娘を祭る。生糸ができる時、もう一回祭祀をおこなわなければならない。この時、あ  
ずき、棗と米で作った「蚕花飯」を食べる。養蚕農家はこれを食べると来年大豊作に成る  
と信じている。近代では、このような煩わしい祭祀順序はだいぶ簡略化され、祭祀儀式は  
年に二回に分けて行われる。一回は清明節前後、蚕の幼虫が孵化される前後の時である。  
二回目は蚕が糸を吐き終わった頃である。これらの時期になると、お店では馬頭娘の神像  
を売り、養蚕農家は家で馬頭娘の位牌（神像あるいは塑像）を置き、蚕の幼虫あるいは新  
しくできた糸を位牌の前に供え、においのない御香を点じて、いけにえとして「ウシ・ヒ  
ツジ・ブタ」（三牲）を捧げ、祭祀を行う。これは「謝蚕神」（蚕神に感謝の意を表す）と  
呼ばれる。[宋 1997 : 322]

江湖州市の東南部にある含山境内では、清明前後蚕の多産を祈る大規模な蚕神祭りで盛



大な儀式がいまでも毎年行われている。

#### 4) 馬頭娘の象徴性について

馬頭娘は、蚕、馬、女を一体化にしたものである。その内在的な要因はいくつがある。第一は、蚕と馬を結びつけたのは、蚕は桑の葉を食べるときに、頭を高く上げ、その様子は馬とよく似ると言われる。第二は、民間で「馬蚕」と呼ばれる大きい蚕は豊作の象徴である。第三、女性は養蚕作業とよく携わるため、蚕を娘と結びつけるようになった。第四、馬頭娘婚姻譚の最後は、馬の皮が娘をくるんで昇天し、蚕になり、一本の木の枝の葉を食べる。この木はその後「桑の木」と呼ばれ始めた、何故なら「桑」(SANG)は、「喪」(SANG)と同音であるからである。娘はここで命を失ったことを記するためでもある。従って蚕のことをまた「蚕女兒」、「蚕姑娘」あるいは「馬頭娘」と呼ばれ、蚕が吐いた糸を「情糸」(愛の糸)と呼ばれる。

宋長宏氏の『騏驥馳騁』には、さらに馬頭娘は頭が馬の頭で、体は女の体であるのは、男女結合の象徴の一つでもあると主張した。女性が養蚕の仕事に携わり、馬は男性の仲間なので、馬頭娘伝説中の重要なプロットは娘とオスの馬との結合のこと、このような男女の結合によって蚕の豊作を祈るためでもある。

#### 5) 馬頭娘信仰伝播路線についての違う認識

現在、馬頭娘信仰の伝播路線についての意見は二つに分かれている。一つは馬頭娘信仰が四川省から揚子江流域に広がった意見である。もう一つは馬頭娘信仰は最初、四川から始まったのではなく、揚子江流域で発生し、だんだん内陸に広がり、四川まで影響を及んだという意見である。

馬頭娘信仰は昔、四川省で非常に盛んだったことは、たくさんの文献から検証することができる。唐の時代以前の文献には、馬娘婚姻談に関する詳しい記載はなかったが、唐以後の文献から、明確に記載されている。唐朝の『原化傳拾遺・蚕女』には：

「蚕女者、当高辛帝時、蜀地未立君長、無所統撰…蚕女旧跡、今在広漢、不知其姓氏。…今家在拾邠、綿竹、徳陽三縣界、毎歳祈蚕者、四方雲集、皆獲靈応。…」

(‘馬頭娘’の遺跡は広漢〔今四川射洪縣あたり〕、また拾邠〔今四川什邠〕、綿竹〔今四川綿竹〕、徳陽〔今四川徳陽〕三つの縣の養蚕農家は広漢に集まって蚕神馬頭娘を祭る風習がある。)

文献に言及した拾邠、綿竹、徳陽は今の成都平原のあたりである。また唐以後の文献には、物語の発生地がはっきりと書かれている。特に徳陽縣にある蚕神の寺院には、十六枚の壁画が残されている、この十六枚の壁画の下に副題があり、馬頭娘伝説のあらすじが書かれている：

強盜肆虐—老翁被虜—老母求救—名駒赴難—馬馱主婦—馬求佳偶—老翁射馬—馬革綑亭—馬革裏尸—馬女成神。

また、宋代の戴植『鼠璞』巻の「蚕馬同本」条には：

「唐『乘異集』載：蜀中寺觀多塑女人披馬皮、謂馬頭娘、以祈蚕。『搜神記』載：女思父、語所養馬、若得父歸、吾將嫁汝。馬迎得父、見女輒怒、父殺馬曝皮於苞中、皮忽卷女飛去桑間、俱為蚕。俗謂蚕神為馬明王菩薩、以此。

(四川の寺院にはよく馬の皮をはおる女の像があり、馬頭娘と呼ばれる。『搜神記』には、女が父のことを心配する、このことを飼っている馬にはなした、もし馬が父を迎えにしてくれるなら、馬の嫁になると約束した。馬が迎えに行つて父を連れて帰り、父親は馬を殺し馬の皮をはがした、有る日皮は突然娘を巻いて、天に昇り、蚕になった。)

元代の無名氏『三教搜神大全』卷三「蚕女」条には：

“高辛時、蜀有蚕女、不知姓氏、父為人所掠、惟所乘馬在。女思父不食、謂母、因誓於衆曰：‘有得父還者、以此身嫁之。’馬聞其言、驚躍振迅、竟至其營。不數日、父乃乘馬而歸。自此馬嘶鳴不肯斷。母以女誓衆之言告父。父曰：‘誓於人不誓於馬。安有人而偶非類乎！能脫我之難、功亦大矣；所誓之言不可行也。’馬跑。父怒欲殺之。馬愈跑。父射殺之、曝其皮於庭。皮蹶然而起、卷女飛去。旬日、皮復栖於桑上。女化為蚕、食桑葉、吐糸成繭、以衣被於人服。一日、蚕女乘雲、駕此馬、謂父母曰：‘上帝以我心不忘義、授以九天仙嬪。’”



よって、四川地方の馬頭娘信仰はいかに盛んになったかについて、代々の文献にたくさん記載されている。

馬娘婚姻譚の文献資料一覧表は以下のものである：

作品	作者	年代	伝説の発生地
『山海経・海外北経』	不祥	戦国時代	不祥
『荀子・賦篇・蚕賦』	荀況	戦国時代	不祥
『太古蚕馬記』	張儼	三国・呉	不祥
『搜神記』卷十四	干宝	晋代	不祥
『原化傳拾遺・蚕女』	不祥	唐代	蜀地
『神女傳・蚕女』	孫顔	唐代	蜀地
『太平広記』	李昉	北宋	蜀地

『鼠璞』	戴植	宋代	蜀地
『三教九流搜神大全』	無名氏	元代	蜀地
『鑄鼎余聞』	姚福均	清代	蜀地

上述した意見に対し、もう一つの意見は馬頭娘信仰が四川から始まったのではなく、最初は揚子江流域から発生し、唐の時代で広がり、四川まで影響を及んでいたという意見である。四川省には独特な蚕神信仰が持っている、すなわち青衣神蚕叢の信仰である。「蚕叢」信仰は馬頭娘信仰より古い蚕神信仰であると考えられる。〔顧希佳 1991：67〕

馬頭娘信仰と青衣神蚕叢信仰は、両方とも四川に共存していることが上述の資料からはわかる。両者はかなり似たり寄ったりである。馬明王（馬頭娘）の像には、額に縦目があり、青衣神の額にも縦目がある（図8を参照）。この共通性から、馬頭娘の伝播路線についての判断は一層難しくなる。しかもこの点に関する文献資料きわめて少ないため、これは、今後の研究課題の中でも問題点である。更に四川地方現在の馬頭娘信仰の分布状況、祭祀活動などについても深く調査したいと思う。

### 3. まとめ

陶雪迎・樋口淳

#### 1) 養蚕の日中比較

日本においても中国においても、養蚕は古い歴史をもっている。

とくに中国においては、夏王朝の祖である禹をさらに遡る「黄帝」の妃であった累妃が最初に蚕を育てることを教えたと言えられるのは、陶の指摘したとおりである。考古学的には、殷代の遺物から養蚕のあとを確認できる。

蚕神信仰は、民間の祭りにとどまらず、周代以来、清朝にいたるまで、王朝の重要な儀礼として伝えられた。

日本における養蚕の起源は、古事記に登場する。

高天原を追放されたスサノオが、オオゲツヒメを殺すと、頭から蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生った。カミムスビノミオヤノミコトが、それをとって種としたというのである。稲作以前の穀物が多く登場する作物起原神話の冒頭に蚕が登場することは、この技術の歴史の深さを語っているように思われる。

養蚕は魏志倭人伝にも登場し、大化改新後の律令制度のもとで租・庸・調の税システムが確立すると、絹は調の中心となった。その結果、奈良時代には近畿から関東、東北まで伸び、平安時代にはほぼ全国に波及した。

中世にはいつて租・庸・調のシステムが崩壊すると、養蚕のあとはたどりにくくなる。一般的には、この時代の養蚕は低調であったとされるが、貴族階級のみならず、武士や豊かな民衆の間にも浸透したものと思われる。鎌倉初期の京都には、絹にかかわる座がいくつも存在したし、奢侈の禁止令がたびたび発せられている。

しかし日本の絹が、商品として特に重要な役割を果たすようになるのは、中国産の生糸が

輸入制限をうけた17世紀末以降であり、幕末の開港を機会に一気に本格化する。そして第一次大戦の後には、中国やイタリアをぬいて世界を制することになる。

日本と中国の養蚕は、ともに長い歴史を有するとしても、その歩みには大きな隔りがある。

## 2) 蚕神信仰の日中比較

陶によれば、中国の蚕神信仰は、主として「累祖」「馬頭娘」「蚕叢青衣神」「蚕花五聖」のように分類することができる。

日本の場合は、「馬娘婚姻譚」にくわえて、筑波山麓に広く分布する蚕影山信仰とその縁起物語を付け加えておく必要がある。この話は茨城県を中心に遠野から山梨長野あたりまで伝説として分布する。もっとも確実な文献記録は「庭訓往来抄」(1631)であるが、さらに古い断片的な記録として御伽草子の「かいこ(戒言)」がある。この話を、簡単に紹介しよう。

天竺王の娘である金色姫は、継母にうとまれ、4回の試練をうけた後に、桑の木で造られたうつぼ船にのせられて流されて、常陸国に漂着し、漁師夫婦に助けられる。夫婦は、子供がいなかったのを姫を大切に育てるが、死んでしまう。夫婦は、悲しんで棺におさめると、ある夜の夢に娘が現れて「我に食を与えよ」という。

棺を開いてみると小さな虫がいたので桑の葉を与えて育てると、途中で4回休んで、最後に繭をつくった。そのころ筑波に一人の仙人がいて、この繭で真綿をつくった。その後、絹綾のようなものも作られた。

ここには異類婚姻のモチーフは見られないが、きわめて素朴な形で蚕が桑を食べ、4回の眠りを経たのちに繭となり、生糸となることを語っている。中国からの蚕の伝来を研究した布目順郎氏によれば、蚕には三眠系と四眠系とがあり「そのうち三眠系とみられるものは楽浪もしくは華北、四眠系とみられるものは華中」からの渡来であるという。とすれば、この縁起譚に登場する蚕は、華中からの伝来とも考えられる。

蚕影神社にかぎらず、日本の各地に蚕神を祀った神社が存在する。「馬鳴(めみょう)菩薩」など蚕を司る仏を祀る寺も少なくない。これらの蚕神を信ずる人たちは、小正月(1月14日)や養蚕のはじまる四月、五月になると神社や寺にお参りして、豊作を祈願し、お札などをもらってきて、家々の神棚にそなえるのである。

こうした寺社にまいる信仰のほかに、あと一つ小正月や初午の繭玉づくりを加えておきたい。

小正月や初午になると、東北から関東・甲信越の養蚕地帯では、米の粉やモチゴメなどで繭の形の団子をつくってミズキやヤナギの小枝につけて神に供えた後に、食べることも多く行われる。その古い記録は室町時代にあるというが、普及したのは明治以降のことである。

陶によれば、江蘇省の嘉興など地域では、まゆを収穫する時、養蚕農家は米の粉で小さい「繭円」と呼ばれるお団子を作って食べて、馬頭娘を祭るという。

時期は異なるが、きわめてよく似た民俗である。季節の祭りの折々に団子を供えて、神とともに食することは、養蚕の祭にかぎらず、日本の祭には一般のことだから、ただちに

中国からの伝播を語ることは性急にすぎるが、注目に値する類似点である。

以上、管見したように、養蚕にまつわる物語も民俗も、じつに多彩である。日本の「馬娘婚姻譚」は、近世になってから中国の文献をつうじて広められたものとする。近世以降にみられる、養蚕の日本各地への浸透は、それ以前に存在した信仰や民俗にさまざまな新しい要素を付け加え、養蚕の民俗そのものを活性化していったものと思われる。

#### 参考文献 1 (日本)

- |      |      |                     |         |
|------|------|---------------------|---------|
| 今野圓輔 | 1966 | 『馬娘婚姻譚』             | 岩崎美術社   |
| 伊藤智夫 | 1992 | 『絹1』『絹2』            | 法政大学出版局 |
| 柳田國男 | 1997 | 「遠野物語」『柳田國男全集第2巻』所収 | 筑摩書房    |
| 布目順郎 | 1999 | 『絹の東伝』              | 小学館     |

#### 参考文献 2 (中国)

- |            |         |                         |           |
|------------|---------|-------------------------|-----------|
| 顧希佳        | 1991    | 『東南蚕桑文化』                | 中国民間文芸出版社 |
| 馬叔田        | 1997    | 『中国民間諸神』                | 團結出版社     |
| 莫福山編       | 1992    | 『中国民間節日文化辞典』            | 中国労働出版社   |
| 上海民間文芸家協会編 | 1992    | 『中国民間文化第5集・稲作文化与民間信仰調査』 | 学林出版社     |
| 上海民間文芸家協会編 | 1995    | 『中国民間文化・民間文化研究』         | 学林出版社     |
| 末長宏        | 1998    | 『麒麟馳騁』                  | 社会科学文献出版  |
| 宋兆麟        | 1995    | 『中国民間神像』                | 漢陽出版株式会社  |
| 王秋桂        | 中華民國八五年 | 『神話、信仰与儀式』              |           |
| 雪梨編        | 1994    | 『中華民俗源流集成・工芸、行業祖師卷』     | 甘肅人民出版社   |
| 楊存田        | 1994    | 『中国民間諸神』                | 北京大学出版社   |
| 袁          |         | 『山海經校注』                 | 上海古籍出版社   |